

## Y05a デス・エデュケーションの手段としての天文学

藤原 智子 (九州大学基幹教育院)

「デス・エデュケーション (Death Education; 死の準備教育)」とは、必ず訪れる死を理解・受容し、残された生を如何に大切に生き抜くか考察する教育のことである。欧米ではここ数十年の間に盛んに行われるようになり、その重要性が認識され始めている。通常は医療や福祉、心理学などの分野からアプローチされるが、宇宙のしくみを通じて星の一生や輪廻等を扱う天文学もデス・エデュケーションと無縁ではない。天文学を学ぶ中で、私たちの起源や未来について考え、私たちの存在とは一体何なのか、生命はどのような条件の下で生き、将来地球はどうなるのか等、私たちの存在理由や生きる意味について考えるきっかけとなり得る。

九州大学の全学教育 (全学部対象) では天文学の基礎科目として、2010年度より総合科目「遙かなる宇宙への誘い」を開講している。現代の天文学は物理学の一分野と位置付けられているが、この科目は総合科目として開講することを踏まえ、授業内容を物理学に限定せず、文系・理系の枠に捉われない幅広い構成とし、その一部でデス・エデュケーションを取り入れた。本講演では、九州大学での取り組みを紹介し、その教育効果を報告する。

通常、専門と異なる分野の科目まで学ばなければならない全学教育は、無意味で退屈だと思われがちであるが、この授業の最終回に「授業で学んだことが自分の将来に役立つか」というアンケートを行ったところ、79%が「役に立つ」、21%が「分からない」と回答した。専門が天文学と関係しない学生でも61%が「役に立つ」(37%は「分からない」と回答した)。その理由として「自分の存在意義や生命について深く考えられるようになった」、「何のために生きているのか?という自分への問いへの答えを見つけ、悩みが軽くなった」等の回答が目立ったことは、天文学がデス・エデュケーションの手段として効果的であることを示唆している。